



青年海外協力隊マレーシア会 16号

水泳と私

峰村文世（平成9年2次隊 水泳）

一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟理事

私は3歳で水泳を始めました。10歳で全国大会優勝。高校時代から水泳以外の事に興味に移り、アルバイトや旅行に明け暮れた学生時代を送りました。大学は社会学部社会福祉学科を専攻し、また水泳の経験を活かし、溺水事故防止のライフセービングを行いながら、学友と共に夏休みは海での生活に明け暮れました。一方海外への興味もあり、春休みにはバックパックで海外旅行にも出かけていました。大学を卒業し海外への興味が強くなり、旅行ではなく生活がしてみたいとの思いから、水泳指導の勉強をして青年海外協力隊に応募し合格しました。

派遣されたのが住民の95%をイスラム教徒が占めるマレーシアトレングヌ州クアラトレングヌでした。着任した時はラマダン中で、生徒は水に入れず中国系の数名の子供たちへの指導から始まりました。イスラム教の強い地域であり、もちろん男女が一緒にプールに入ることはなく、また女子がプールに入ったときに外から見えないようにプールの周りには壁が張り巡らされているプールもありました。そんな環境で、少しずつ生徒や町の人々にも受け入れられ、1997年から1999年まで2年間、それなりに充実した隊員生活を過ごすことができました。

帰国後、ニュージーランドで2年間水泳の指導をする機会を得ました。その後日本に戻ってからも海外で活動したいという思いが収まらず、機会を窺っていたところ、マレーシアから2006年に開催されることが決定したFESPIC GAMESに向けて「障害者スポーツの調査」という短期隊員派遣要請があり、2002年にマレーシアへ戻ることになりました。要請は「調査」でしたが、実際は2004年アテネで開催されるパラリンピックの選手の指導がメインとなり、計2年4か月間活動を行ないました。そしてパラリンピックの強化合宿に20名の選手と半年間合宿することになりました。当時一番驚いたことは、障害者がパラリンピックに参加する場合、半年前から強化合宿が行われていたこと、また障害者スポーツ大会に参加し入賞すると贈られる賞金は健常者が受け取る賞金と変わらなかったこと、日本では考えられなかったことなので日本が遅れているのかマレーシアが進んでいるのか、兎に角、強く印象に残っています。ちなみに日本では、2008年に行われた北京パラリンピックの時に初めて報奨金が贈られるようになりました。

2004年には、アテネパラリンピックマレーシア代表監督として3選手とともに参加しました。アテネパラリンピック終了とともに任期が満



了し帰国。障害者スポーツに関わりたいたいという気持ちが強くなり、2005年秋から四肢の欠損のある鈴木孝幸選手の指導を行うこととなりました。彼は2004年アテネパラリンピックで銀メダル、2008年北京で金メダル2012年、ロンドンで銅メダルを獲得しました。北京、ロンドンでは、ヘッドコーチとして参加しました。彼との出会いがパラ水泳の技術指導を大きく向上させてくれました。



(注：この後、一人ひとり違った障害のある選手をどのようにクラス分けを行うか、また障害を持った選手が競技を行えるようにどのように公平に補佐をするか詳しく説明して頂いた。普段知らないことばかりで大変興味深い話であったが、正しく説明することはにわか仕込みの知識では困難ですので、大変残念ですが割愛させていただきます。)



マレーシアと日本の障害者に対する対応は、マレーシアは自分で行動することが基本で、困ったときは、周りの誰かが助けてくれる、日本は過剰に助けよう、配慮しようとするところがあるように感じます。例えば、四肢に欠損があるオリンピック水泳の鈴木孝幸選手が「腕がないことで不便を感じたことはありませんか」等の質問を受けることがあるが、生まれた時から無ければ、不自由を感じることはなく、無いから不便と取られるとどうも違う。子供が「なぜお兄ちゃん腕で無いの?」と聞いてくれたほうが、素直に答えができると言っていました。10年前は、障害者スポーツは、スポーツ欄では

なく、社会面に取り上げられていました。選手も「さん」付けで書かれて、選手とは書かれていませんでした。またリオデジャネイロパラリンピックでは、金メダルを1つも取れないことがありました。もしオリンピックであれば、「惨敗」と書かれたと思いますが、「惜敗」と書かれ、金メダルに触れず、銀メダルがロンドンオリンピックより多かったことが強調されていました。しかし2020年の東京オリンピックが決まってからパラリンピックをスポーツとして見て頂くようになったことをうれしく思います。

3週間前にロンドンでマレーシアで教えていた選手に会う機会があり、身体に障害があった教え子が今でも水泳の選手であること、またその息子さんが知的障害のある水泳の選手であることに感銘受けました。



講演後、会場から質問が出て、そのひとつは、健常者が障害者を指導することの難しさだった。峰村さんの答えは、「泳げるところから、いかに早く泳げるように指導するかは難しい。それぞれの障害を健常者である自分がわかることはできない。障害者各人が持っている能力をどう引き出していくか、選手の目を見ながら、よく話し合いながら指導するようにしています。」ということでした。



本稿は、第5回総会での講演を書き起こしものを掲載しました。(文責:郡 昭治)

第5回総会報告

会長 白山 肇

2010年9月に、本会設立のための準備会を東京広尾「JICA 地球ひろば」3階講堂で開催し、帰国隊員名簿の不備や突然の呼びかけにもかかわらずOB・OG、元駐在員・調整員はじめ関係者120名余りがかけつけました。隔年の総会開催を会則でうたい、2011年9月(第1回)と2013年9月(第2回)にはいずれも100名を超える参加があり、そして協力隊設立50周年を記念した2016年1月(第3回)には、クアラルンプール(K.L)で開催し46名という多くのOB・OGの参加を得ました。2017年には第4回総会をJICA 市谷地球ひろば「国際会議場」で60名の参加がありました。

設立趣意書には、「志を持つ集団、それが青年海外協力隊です。100人が100様の活動をし、そこには100の苦楽がありました。それらは、全て各々のその後の人生の新しい出発の原点であったことでしょう。活動の主体は隊員ですが、それを支えた駐在員・調整員をはじめとするJICA職員との協働があったからこそ、多くの事が成し遂げられたのではないのでしょうか」とあります。また、目的に「本会は、会員間の親睦を旨とする」があります。準備会を含め9年が経過した本年9月に第5回目を迎えることができました。この間、約10年という年月が経ちました。

10年一昔、会員の皆様が共に10歳、年を取ってきました。マレーシアへの派遣隊員数は2011年6月末1,200名でしたが、直近では1600名を超えています。また、本会の会員数は設立当時300名余りでしたが、現在では600名を超えています。協力隊事業も半世紀を超え、大きく様変わりしているように思います。年々変化していく国際社会及び日本社会のまわりの環境に呼応した「青年の国際協力事業は何であるのか?」が問われています。54年前に模索し、現在累計4万5千人を超える隊員が成し遂げた活動の礎が活かされることを期待します。

本総会では、第1号議案(第IV期活動報告・会計報告)、第2号議案(第V期活動報告案)、第3号議案(役員改選案)が予定通り議論されました。参加された皆さんの協力を頂き、会長としてこの場を借りて感謝申し上げます。第IV期活動報告では、2地区(九州・近畿)の集会等が実施事業として、また広報活動事業としては12号から15号までの会報発行等が報告されました。第V期活動計画案及び役員改選案が承認され、そして自由討議の中で1つの提案「ボルネオ保全トラスト」について本会が何か支援活動ができないか」がありました。いくつかの意見もでましたが、総会では結論までには至りませんでした。そのため、今後役員会で詰めていくことで了解を得ました。

最後に、今後の課題として「総会の参加者数の減少」があります。準備会・第1回・第2回が100名を超え、またKLで開催された第3回は、国外にも関わらず46名の参加がありました。しかし、前回の第4回では60名、また今回は50名まで減少しています。会の継続は会員一人ひとりの参加による志の繋がりが大きいと思います。高齢化する会員の現況とわが国を取り巻く社会変化の中で会員相互の意思疎通の大切さを痛感しています。各会員が声を掛け合い、多くの仲間の“集まり”に結実することを祈願します。



総会に引き続き、峰村史世 OG による講演「水泳と私」がありました。超多忙の業務の中、本講演の快諾を頂きましたことを感謝申し上げます。講演内容につきましては本誌で掲載させていただきました。

第二部の懇親会では、来賓として着任直後の小林広幸協力隊事務局長と足立房夫協力隊を育てる会顧問に出席いただき、和気あいあいの中、楽しい懇親の場となりました。



司会 早田 OG



第5回総会 総会資料より

総会では第1号議案：第Ⅳ期活動報告・会計報告、第2号議案：第Ⅴ期活動計画、第3号議案役員改選案が討議されそれぞれ原案通り承認されました。総会資料より主に活動報告を抜粋掲載いたします。

活動報告 <活動内容> (2017年9月1日～2019年8月31日)

I 実施した事業

1. 地区集会

第三回九州地区集会 2017年11月25日～26日 於 鹿児島中央ビルディング8F

九州ブロック担当弓場秋信、金子博両氏の尽力で鹿児島市にて開催

- ・マレーシア国民大学(UKM)のシャズリンダ モハマド ユソフ氏による基調講演

「日マ交流事業が若い世代に与えた影響」

- ・鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏による講和「明治維新と西郷隆盛」

- ・マレーシアからの来日の方々も交え懇親会

- ・鹿児島県マレーシア友好協会との交流会 於 日置市

シャズリンダ講師の友人8名がマレーシアから来日され、九州各県からのOBOGや、地元鹿児島の協力隊を支援する会、鹿児島県職員など、約40名の参加となった。

第四回近畿地区集会 2018年9月22日 於 JICA 関西

近畿ブロック担当西村善継、東海ブロック担当常木春枝両氏の協力のもと、開催

- ・クアラルンプールでロングステイ中の宇田耕三氏（フィリピンOB、獣医師）による

「政権交代後のマレーシアの現状とロングステイ」講演、懇親会

福島や香川、岡山からのOB・OGなど、32名の参加があった。

2. 協力隊まつりへの参加 2018年4月21/22日、2019年4月20/21日 於 JICA 市ヶ谷
グローバル・フェスタへの参加 於 お台場センタープロムナード

2017年9月30日、10月1日、2018年9月29日

3. 関連団体の事業への協力・行事参加

関連団体：青年海外協力隊事務局、協力隊を育てる会、青年海外協力協会、日マ協会

II 広 報

1. 会報発行 (年2回) 12号(2017年12月)、13号(2018年6月)、
14号(2018年12月)、15号(2019年6月)

2. マレーシア関連情報の配信

3. ホームページの更新

III 運営事項

総会開催 (第四回：2017年9月17日) 参加者54名 来賓4名

於 JICA 市ヶ谷地球ひろば 国際会議場 J's カフェ

星槎大学教授、ボルネオ保全トラスト 坪内俊憲氏の「マレーシアボルネオ島の熱帯林保全と私たちの生活の関係」という基調講演のあと懇親会を開催した。

役員会の開催 例会(在京役員を主とした会議)全16回

<役員改選> 新たに東北ブロック担当に荒正文OB(昭和44年2次隊 バスケットボール)に加わっていた
だき、早田まり(旧姓斎藤まり)OGが東北ブロックから近畿ブロック担当に移りました。

第5回総会懇親会の風景



寄付のお願い 寄付は随時受け付けています。
よろしくお願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140 番号 51611341

（郵便局外から振り込みの場合：店番 018、
普通口座 5161134 です）

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会
代表 白山 肇

訃報

岡田美智子さん（昭和 49-4） 2019 年 5 月ご逝去
突然の知らせに深い悲しみに包まれています。
これまでの活動に敬意を表するとともに、心より
ご冥福をお祈りいたします。

事務局からお願い：住所、メールアドレスを変更された時は右記連絡先までお知らせください。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と 2010 年の青年海外協力隊 OB/OG 会出席者に E メールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在 600 余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行

青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇

〒162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば メールボックス 51

TEL：090-7186-1065（国際協力サロン）

MAIL：malaysia@ics-together.com

URL：

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

2019 年 12 月 19 日発行